

親は子を思い、子は親を思う。それに変わりはない。だが、親が真の親であり得ることができようか。少くともこの反省は、親にもほしいと思う。

父が死んで五年になる。早いものである。

私は、私の背に父の写真をかかげ六月中を拝んだ。父は毎日私に教える。

追憶する父には少しの毒もない、ただ聖なる如来へとひきこまれる。じつと見てみると、胸の底から熱いものが込みあげる。

私は辛苦な時、父を思い出すと楽になる。

私は孤独を感じる時、父を思い出すとにぎやかになる。

父には我慢がなかった。我慢がないから世のいわゆる成功がなかった。だが、なんとその晩年の光輝に満ちていたことよ。

父は終生、夏になつても絹の羽織を持たなかった。私の古い銘仙の羽織を喜んで着て歩いた。美しいトンビも、時計も、衣服も、ついに一生身につけさせてあげる時がなかった。だが一回でも、いい着物を買えと言ったことがあるか。

芝居に、映画に、遊山に行かせよと求めたことがあるか。そうした一切で不平な顔を見たことがあつたであろうか。

私は広島での講演には、父さえ聞いていてくれたらいいと思つていた。「兄や、ありがたい講演だったのう。」今もその声が耳に残る。

父は死ぬるまで求める人であつた。誰の前にも、したがって子の前にも。

父が聞いた最後の法話は「聖道の慈悲と浄土の慈悲」だった。

しかもそれは、父の生命だった私の口から話し出された法話だった。

「俺はまだ、お前たち子供に教育は受けんぞ。」そう言うて渡つた親の晩年は、沙漠のように寂漠であろう。

幼くして親に習い、若くして師に習い、壮者にして社会に習い、老いて子に習う覚悟、愚者はいずれの時にも処にも愛せられる。

父は念仏の人だった。誰が見ても、いつ見ても念仏の人だった。

道楽もなかった。趣味もなかった。仏をおいてほかに何もなかった。

父は、忍従の人だった。どんなつらい時にも、無理を言われる時も、馬鹿にされる時も、貧しい時も、よく忍従する人だった。仏説によれば、かかる人が有力大人である。

おそらく、兄弟だれでも、父には「ああ！」という感じ、同情の心、もつたいないという心がおこるのは、この忍従の徳のゆえかも知れない。

父は感謝の人だった。世界一等の幸福を自覚した人だった。

お金たった一円、「くれるのか。」父よりもあげた方に涙が出る。

父は働いた。一生働きぬいた。六十九歳までは事実上の戸主であった。そして一生涯、辛苦のし通しであった。その念仏は、七十四年の辛苦に洗われた念仏だった。

父に孝行するのは容易だった。

ただ、私が念仏に生きること、私が如来にまで生きることそれ自体であったから。

私は私の弟妹たちが、だらしのない一生涯を行こうとする時、最後は父の呼び声に翻然として自覚の天地に帰ることを信ずる。

父は一言も高飛車な説教をしなかったがゆえに、一番雄弁に、われに語る人である。

親の相の上に鬼の相を見せられた時、子の純な心は、素朴的な孝の心を蹂躪ふみにじられる。再びこの子が孝の天地に出るためには、悲痛な宗教的転回、精神的革命を要する。多くの人は親に対する反逆心だけで終わる。

私は父によつて、私の孝心を蹂躪されなかった。もし、かくも親を思うこと、それによつて念仏の天地に誘われて生きることが父にとつての孝であるならば、孝は父が2成就したのである。

毎夜続けて父の夢を見る。

年ふるままに、日に日に新しく、父は私に教え、私に近よる。私はまた年々、父のような生活のできないことを悲歎する。

「穢国ニ必ず化スル」という世界を語る時には私は必ず、父を語る。父は如来大悲のように私になつてくれた。死んだ後、いよいよ私に還相することを感得する。

型をきめて、それに私を入れようとししないで、私を自由の野に放つて、私になる父である。

私が行けば、火の中へでも、氷の中へでも、笑つて入つてくれる父だった。

私は父を思っていると、無条件に、涙にさそわれる。その涙は、深い深い地下水に通ずるものであろう。念仏、合掌、餓鬼、感謝、白道……そうした多くのものが、しかもたった一つの強い力となつてこみあげる。

ああ。父の往つた道、それは親鸞聖人の生きたまう道だった。

私もまたこの道を細々たどらしてもらうのだ。

「お父さん！」私が心にささやく日、私の前にははっきりこの道が見える。

そうして、だれにもない苦衷をも、語る事ができるのは、ただ父の胸中においてである。

それは、聖人にふれる心であり、芭蕉に、良寛に、一茶にふれる心であり……寂しくても静かな、微かな喜びと光、じつとりぬれた心である。